

父親・母親の食事供給行動に対する 乳児の摂食外行動の出現状況

— 離乳食場面の観察から —

福田 佳織・森下 葉子・尾形 和男

要 旨

子どもに「離乳食を与えること」は、育児の悩みとして上位に挙がる。本研究では、こうした実態を明らかにするため、家庭での離乳食場面を観察し、①親が乳児に食事を与えた（食事供給行動）際に乳児が摂食以外に示す行動（摂食外行動）にはどのようなものがあるか、②親の食事供給行動時に、乳児はどれだけ摂食外行動を示すかを明らかにした。対象は、離乳食開始期～生後10ヵ月の乳児とその父親および母親の協力を得られた10家庭（父子10組、母子10組の計20組）である。分析の結果、摂食外行動として13カテゴリーが抽出された。また、食事1回あたりの摂食外行動の平均出現頻度は、父親に対して19.3回（SD = 21.52、3～77回）、母親に対して18.9回（SD = 19.40、26～80回）であった。この摂食外行動は、父親の食事供給行動に対して平均32.12%（SD = 24.36、12.50～94.20%）、母親に対して34.93%（SD = 19.23、12.33～65.38%）を占めた。このことから、個人差は大きいものの、平均すると親の食事提供行動の3分1以上は乳児の摂食行動に至らないことが明らかになり、離乳食を与えることの困難さが浮き彫りとなった。

問題と目的

ベネッセ教育総合研究所（2018）によれば、幼い子どもを持つ母親にとって、「離乳食・幼児食の与え方」は子育ての悩みで最も高く挙がるという。その悩みは、次点の悩みと2倍差がつくほどであり、特に低月齢（6ヵ月～9ヵ月）・中月齢（10ヵ月～1歳1ヵ月）で高い（それぞれ、45.8%、42.1%）。厚生労働省の平成27年乳幼児栄養調査結果の概要によれば、0～2歳児の保護者の離乳食に関する悩みの内訳は、作り手の負担（33.5%）や丸のみする（28.9%）に続き、食べる量が少ない（21.8%）、食べ物の種類が偏っている（21.2%）、食べさせるのが負担・大変（17.8%）となっている。これらのことから、親は子どもに十分な量をバランスよく与えることに困難を抱えていることが窺える。

食事の序盤は空腹のために食事に集中しやすいが、徐々にお腹が満たされてくると、食事以外のことに気を取られやすい。特に、離乳開始期以降は、乳児の身体運動がより発達するため、食事への集中が切れたり、眠くなったり、少し食欲が満たされたりしてくると、乳児はあらゆる行動を示して食事を中断しようとする。そのため、乳児に十分に食べさせたい親の欲求と食べたくない乳児の欲求とが衝突しやすくなっていく。また、注意力が持続せず、安易に周囲の音や物によって集中が途切れやすい気質の乳児もいる。親にとって用意していた食べ物を最後まで与えることは至難の業である。

そこで、本研究では、離乳食場面を観察し、親が乳児に食事を与えた際に乳児が摂食以外にどのような行動を示すか、また、親が乳児に食事を与えた際に、乳児はどれだけ摂食しないかを明らかにする。そうすることで、親が離乳食を与えることにどれほど苦慮しているか、その実態を示すことができるだろう。

なお、本研究では、親がスプーンなどの食具（山口（2001）は、食事に使用する棒状のものを食具、器状のものを食器としている）に食べ物を乗せた状態、あるいは、親が手づかみで食べ物を持った状態で乳児の口元まで近づけようとした時点から、乳児がそれを口に入れた時点まで、あるいは、乳児がそれを食べないために親が乳児の口元から食具や手を離し始めた時点までの一連の行動を親の「食事供給行動」とする。また、そのように口元に近づけられた段階で乳児が摂食以外の行動を取り、その結果、親が食事を与えられなかった（食器具や手を乳児の口元から離れた）場合に、その食事を与えられない直接的原因となった乳児の行動を「摂食外行動」とする。一方、親の食事供給行動による食べ物を半分以上口の中に入れた時点から、その食具を口から引き出す、あるいは、親の手を口元から離す前までの一連の行動を乳児の「摂食行動」とした（ただし、食べ物を口に入れた直後にはほぼすべてを口から出した場合は摂食外行動とした）。

食事を一時中断して親子でコミュニケーションを取っていたり、親が乳児の食べるタイミングを見計らって食事を与えずに待っている状態など、親の食事供給行動が示されていない状況で見られた乳児の摂食以外の行動は分析対象外とする。

ところで、わが国の父親の育児参加時間は諸外国と比べて圧倒的に短い。日本の6歳未満の子どもを持つ父親の1日あたりの育児時間は週平均45分であるのに対し、アメリカでは3時間14分、スウェーデンでは3時間21分となっている（総務省、2017）。それでも、過去の同調査（平成8年、13年、18年、23年）の育児時間18分、25分、33分、39分（総務省、2012）と比較すると、徐々にではあるが、父親が子どもに関わる時間は増えているといえる。また、男女の役割分担意識も年々薄れており（内閣府、2016）、特に若い男性では、家事育児にかかわることを当然とする意識が芽生えているようである（尾形、2013）。本研究では、今後、さらなる父親の育児参加が増えることを鑑み、父親、母親双方の離乳食場面を観察し、分析することとする。

方 法

(1) 協力者

関東圏在住で離乳食開始期～生後10ヵ月の乳児を持ち、父親・母親ともに調査協力を得られた10家庭（父子10組、母子10組の計20組）を分析の対象とした。乳児の平均月齢は8.9ヵ月（8～10ヵ月）であり、男児4名、女児6名、第1子8名、第2子2名である。父親の年代は20代2名、30代7名、40代1名であった。母親の年代は20代5名、30代5名であった。

(2) 調査期間

2017年8月24日～2019年6月23日に調査を実施した。

(3) 調査手続き

著者の知人等を通して協力者の候補となる家庭に調査の概要を伝えた。そして、了承を得た家庭に対し、著者よりメールまたは電話連絡をした。その際、調査の詳細について書かれた説明書をメール添付または郵送し、その後、協力者の質問に応じた。その上で、調査協力を了承した家庭と調査日時のアポイントメントを取り、その日時に調査者（第一執筆者あるいは第二執筆者）が1人で家庭訪問した。訪問時、調査者から今回の調査についての詳細を再度説明し、了承を得た場合に調査承諾書に署名をもらった。家庭訪問では、観察調査（ビデオ撮影）、および、質問紙調査、インタビュー調査を行った（順番は、協力者の都合によって異なる）が、本論文では、観察調査データのみを使用するため、質問紙調査、インタビュー調査の内容は割愛する。ただし、質問紙調査により得られた属性に関する情報（父母の年代、および、子どもの月齢・性別・出生順位）は使用する。

父親、母親それぞれが乳児に離乳食を与えている場面を、調査者が撮影した。撮影にあたって、食事を与える親と乳児の二人きり（調査者を除いて）の場面とすること、食事をすべて食べきる必要はないこと、食事終了は親に任せ、時間の制限を設けないことを説明した。また、1回の食事中に父親と母親の交替は行わないため、2回分の離乳食場面の撮影が必要となることから、父親と母親とで調査日が異なることもあった。ただし、父母間で調査期間が空いた場合でも最大19日であり、子どもの月齢が大きく異なることはなかった。撮影は、可能な限り親子の顔がよく見える場所から撮影された。できるだけ普段通りの環境での食事をお願いしたため、TVがついていたり、音楽がかかっていたりするケースもあった。

(4) 分析方法

まず、第一執筆者が、分析に使用する全データを視聴し、親が食事供給行動を示した際に乳児が摂食しなかった場面（親が食事供給を一時中断した場面）を抽出した。そして、親の食事供給が中断される直接的理由となった乳児の行動に着目し、中断理由が類似しているものをグルーピングして、摂食外行動カテゴリーを作成した。その後、各カテゴリーの摂食外行動を示す乳児の映像を全執筆者間で確認し、最終カテゴリーを作成した。

次に、第一執筆者が行動コーディングシステム（BECO2）を用いて、ケースごとにこれらのカテゴリー別「摂食外行動」、および、親の「食事供給行動」、乳児の「摂食行動」をコーディングした。口に入れた瞬間や食具が口から出る瞬間が見えない場合であっても、乳児の頭の角度や親のスプーンの動きと角度、食具に食べ物がなくなっている等から、親の食事供給行動や乳児の摂食行動があったと判断できる場合はコーディングした。なお、乳児が食具に乗った食べ物の半分程度しか食べていない場合も、摂食行動があったとみなした。また、乳児の摂食行動時に口の周りに食べ物の一部がついてしまい、親がその口の周りの食べ物を食具で拭い取って乳児の口に入れた場合、その行動は新たな親の食事供給行動や乳児の摂食行動としてカウントしなかった（すでに親の食事供給行動、乳児の摂食行動として1回カウントしているため）。そして、全体の2割にあたる2家庭（父子2組、母子2組の計4組）について、第二執筆者と第三執筆者がそれぞれ独立にコーディングし、第一執筆者との一致

率を算出した。その結果、カテゴリー別「摂食外行動」の一致率は96.00%、親の「食事供給行動」の一致率は99.34%、乳児の「摂食行動」の一致率は99.01%であり、高い一致率が得られたため、その他のデータの分析については第一執筆者のコーディングを用いた。なお、一致率算出の際に見られた不一致の箇所は再検証して一致を試み、最終的には4組のコーディングが100%一致した。

このように各種行動をコーディングした後、①食事1回あたりの摂食外行動の平均出現頻度、②各カテゴリーの摂食外行動が全摂食外行動に占める割合、③親の食事供給行動に対する乳児の摂食外行動の割合を算出した。

(5) 人権の保護及び法令等の遵守への対応

調査にあたっては、父親及び母親に対して、「研究に関する説明書」（本研究の目的や内容、データの扱い、調査の謝金、調査の撤回等について詳細に書かれたもの）を手渡し、調査者がそれを読み上げる形で、父母と一緒に確認した。これらの内容に十分な理解と了解を得られた場合に限り、父母に「調査承諾書」への署名をもらい、調査に参加してもらった。また、承諾後も、協力者には何の不利益もなく、いつでも調査を撤回できる自由があることを説明し、撤回書も配布した。

なお、質問紙等は全て番号で管理され、照合のためのデータは別に保管するようにし、連結不可能とした。撮影された映像は、学内で数値化し、そのデータを分析した。映像は個人研究室（鍵つき）で厳重に保管し、研究終了後に消去（信頼性の高いデータ末梢ソフト使用）する。個人が特定され得るデータを扱う必要がある場合は、LAN等非接続のパソコンを使用した。

結 果

分析対象は、親が乳児に食事を与え始めた時点から、親の判断で食事終了となった時点までの映像である。20組の食事時間の平均値は717.22秒（SD = 258.94、343.74～1338.74秒）であった。なお、父親10組の食事時間の平均値は702.55秒（SD = 304.48、343.74～1338.74秒）、母親10組の食事時間の平均値は731.88秒（SD = 219.92、414.31～1052.45秒）であり、父母間の食事時間には有意差はなかった（ $t(18) = -.247, n.s.$ ）。

(1) 乳児の摂食外行動カテゴリー

乳児の摂食外行動は13カテゴリー作成された（Table 1）。「手で食べ物をつかもうとする」に関しては、月齢が高い場合は自分でつかんで食べることを促す親もいる。先述の通り、親の食事供給行動が阻害されていない場合は、摂食外行動としてカウントしていない。また、「近づけられた食器をつかむ」行為に関しても、そのまま親と一緒に自分の口に入れている場合は摂食外行動としない。

Table 1から、乳児は、親の食事提供行動を様々な行動を用いて意図的・無意図的に阻害していることが明らかになった。

Table 1 乳児の摂食外行動

| カテゴリー |
|---|
| 1 泣く・ぐずる |
| 2 食べさせにくい身体の向きにする（横・下・後ろを向いている、身体を反らしているなど） |
| 3 身体を動かす（手・腕・首を動かす、身体を揺する・反る（動いている状態）、移動するなど） |
| 4 手で顔を覆う・顔をこする |
| 5 玩具を食器具や食べ物に付けようとする（手で食べ物を触ろうとする） |
| 6 口に指や食器具を入れる、玩具をなめる |
| 7 近づけられた食器具や親の指をつかむ |
| 8 口を開かない（不十分にしか開かない） |
| 9 ブーっと息を吹く（食べ物が口に入る前） |
| 10 発声する |
| 11 あくび・くしゃみをする |
| 12 食べ物が口に入っている（もぐもぐしている） |
| 13 口に入れた食べ物を飲み込まずに吹き出す（吐き出す） |

(2) 乳児の摂食外行動の出現状況

Table 1の摂食外行動、および、親の食事供給行動、乳児の摂食行動をコーディングした。

①食事1回あたりの摂食外行動の平均出現頻度

食事1回あたりの摂食外行動の平均出現頻度を算出した。上述の通り、摂食外行動は親の食事供給行動時に出現したものに限定している。したがって、連続的に表出している摂食外行動であっても、その間に親の食事供給行動が複数回現れれば、その回数分カウントされる。例えば「泣く・ぐずる」という摂食外行動が継続している間に、親が2回食事供給行動を示し、結果的に乳児が摂食行動を取らなかったとすれば、「泣く・ぐずる」という摂食外行動は2回とカウントされる。

また、乳児の摂食外行動によって親が食事を与えられなかった場合、その直接的要因となった摂食外行動のみをカウントした。しかし、2種類以上の摂食外行動が生起している状況で、それらすべてが食事を与えられなかった要因となっている場合は、それぞれを1回とカウントした。ただし、「口を開かない」カテゴリーに関しては、他の行動は表出しておらず口を開かないという理由だけで食事を与えられなかった場合に限ってコーディングした（例えば、顔をこすっている場合も口は開いていないが、この場合は「口を開かない」はカウントせず、「顔をこすっている」のみカウントすることになる）。

その結果、父親との食事場面における摂食外行動の平均出現頻度は19.3回（SD = 21.52、3~77回）であり、母親との食事場面における摂食外行動の平均出現頻度は18.9回（SD = 13.82、5~41回）であった。摂食外行動の平均出現頻度について、父親と母親との間で有意差は見られなかった（ $t(18) = .049, n.s.$ ）が、父母間の相関は有意ではないものの比較的関連することが示された（ $r = .497, n.s.$ ）。

なお、食事時間と摂食外行動頻度との相関は見られなかった ($r = .071, n.s.$)。

このことから、どの乳児も摂食外行動を示すが、摂食外行動頻度には個人差が大きいことが示された。また、父親と母親とで乳児の摂食外行動頻度に差はなく、どちらが与えても同程度の摂食外行動が示されることも明らかになった。さらに、父母間に比較的相関が見られることから、乳児は父親に対しても母親に対しても同程度の摂食外行動を示す傾向があることが明らかになった。なお、食事時間が長いことで摂食外行動が増えることはないことが示唆された。

②摂食外行動カテゴリー別出現率

各カテゴリーの摂食外行動が、全摂食外行動に占める割合を算出した。その結果、各カテゴリーの摂食外行動の出現率はFig.1の通りとなった。ここから、乳児の身体の動きの摂食外行動が最も多く、次いで乳児が口を開かない（不十分な口の開き）という摂食外行動が多いことが明らかとなった。

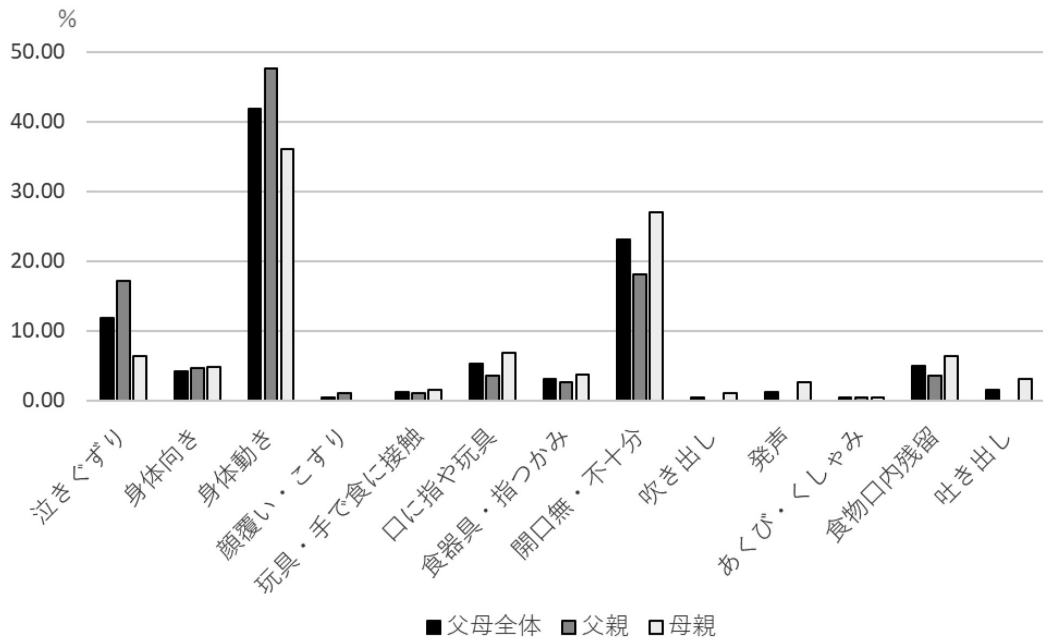


Fig.1 各摂食外行動カテゴリーが全摂食外行動に占める割合

③親の食事供給行動に対する乳児の摂食外行動の出現率

親の食事供給行動に対する乳児の摂食外行動の出現率を算出した。ただし、親が食事供給行動を示した場合であっても、乳児が摂食するタイミングの前に、親の都合で食具を口元から離れた場合（親が床に落ちたものを拾うなど）は、食事供給行動をカウントしなかった。

その結果、まず、父親の「食事供給行動」の平均値は47.50回 (SD = 17.28, 24~73回)、母親の「食事提供行動」の平均値は47.30回 (SD = 19.40, 26~80回)であった。食事供給行動頻度に父母間の

有意差は見られなかった ($t(18) = .024, n.s.$)。

そのうち、乳児の摂食外行動（ここでは、摂食外行動の延べ回数ではなく、1回の食事につき1回の摂食外行動として算出）により摂食させられなかった率は、父親で平均32.12% (SD = 24.36、12.50~94.20%)、母親で平均34.93% (SD = 19.23、12.33~65.38%)であった。これらの率に父母間で有意差は見られず ($t(18) = -.286, n.s.$)、父母間の相関も見られなかった ($r = .179, n.s.$)。なお、食事時間との相関も見られなかった ($r = -.165, n.s.$)。

考 察

(1) 乳児の摂食外行動カテゴリー

親の食事供給行動に対して、多様な摂食外行動が現れることが明らかになった。そうした要因は、乳児の様々な側面での発達が関与していると考えられる。

最も頻度が高かった「身体動き」に関しては、乳児の自己主張の現れと受け取れるものも散見された。例えば、近づけられた食具を持つ親の手を押し返し、“食べない”という積極的拒否を示す動きや、近くのおもちゃなどに手を伸ばそうとし、“遊びたい”という欲求を示すような動きである。Tomasello (2008)によれば、9ヵ月頃になると、自分の意思を他者に伝えようとするようになるという。食事場面では、こうした自己主張の発達によって「身体動き」の頻度が高まったと推測される。続いて頻度の高かった「開口無・不十分」に関しても、食べ物を近づけられても一向に口を開かないという明確な摂食拒否行動として生じるケースが多く、自己主張の現れと考えられる。

他の摂食外行動についても、例えば、自分に近づけられた食器具や親の指をしっかりと握る「食器具・指つかみ」に関しては、生後5ヵ月以降に手のひら全体を使って物を握れるようになる (Halverson, 1931) という手の動きの発達が、「発声」に関しては、5、6ヵ月になると喃語を表出するようになるといった言語発達が関与しているだろう。また、自分の方に食べ物が近づいてきたタイミングで手を伸ばし、触ってみようとしたり、自分の持っている玩具を食べ物に付けてみようとしたりする「玩具・手で食に接触」は、8、9ヵ月頃から成立する三項関係が関与しているとも考えられる。親が慎重に食具に食べ物を乗せている様子に、乳児が注意を向け、興味を持てるようになるためである。

もちろん、食事中は身動きが制限されたり、食事以外のことが許されないため、飽きて身体が動いてしまうこともあれば、食欲が満たされて眠くなり、ぐずりや泣きが出表するケースもある。しかしそうした生理的欲求が満たされないことによる行動だけではなく、上記のような心身の発達によって表出可能になった行動も数多く見られた。こうして摂食外行動のパターンが多岐にわたる結果になったと考えられる。

(2) 乳児の摂食外行動の出現状況

① 食事1回あたりの摂食外行動の平均出現頻度

食事提供者が父親であっても母親であっても、乳児の摂食外行動の頻度に差はなく、1回の食事内で平均19回前後の摂食外行動が表出することが明らかになった。ただし、乳児間の個人差は大きいこ

と、また、同一乳児の摂食外行動は父親と母親に対して同様の傾向で表出することが示された。

子どもの食にまつわる悩みに関する先行研究の対象者は母親であることが多い（例えば、天野、2011；ベネッセ教育総合研究所、2018）ことから、離乳食を与える担当は主に母親であると考えられる。しかし、上記の結果から、母親ほど離乳食を与えた経験のない父親が離乳食を与えても、乳児が表出する摂食外行動頻度は母親と変わらないことがわかる。ただし、摂食外行動数には大きな個人差があり、同一乳児が父親・母親に示す摂食外行動は同傾向であることから、乳児側の要因、特に気質が食行動に関与しているとも考えられる。例えば、Gartstein & Rothbart (2003) のIBQ-Rの日本版（中川・鋤柄、2005）によれば、“活動性の高さ”の項目には「飲ませたり食べさせたりする時、もがいたり、足をバタバタさせたりする」などがあり、離乳食場面で摂食外行動が表出しやすい気質があると考えられる。また、“制限された時の負の情動の表出”の項目には「動きを制限されるような場所（ベビーチェア、ベビーサークル、チャイルドシートなど）に置かれると抵抗する」などがあり、一定時間ベビーチェアに座らせる食事時に摂食外行動が表出されやすい乳児がいることも窺える。このように、乳児の個人差によって、離乳食場面での食事提供が困難になる可能性があると考えられる。もちろん、父親が日常的に母親の食事供給行動を目の当りにしているために、父母間で食事供給行動の様相が類似している可能性もある。そのため、乳児は父親と母親に対して同様の行動を取りやすいとも考えられる。

②摂食外行動カテゴリー別出現率

乳児の摂食外行動のうち、身体の動きによる摂食外行動が最も多く、次いで乳児が口を開かない（不十分な口の開き）による摂食外行動が多いことが明らかとなった。

映像を見ると、乳児が緩やかに身体を動かした場合、親はその動きに合わせて食具を乳児の口に近づけたまま追いかける形をとることが多かった。しかし、親が食べ物を乗せて差し出した食具を乳児が手で払いのけたり、身を真後ろに反らしたりしたりという大きな動きや素早い動きをした場合、短時間ではあるが、親は食具を乳児の口元から離して食事を中断することが多かった。また、口を開かないという摂食外行動に関しては、乳児が開口するまでしばらく乳児の口元に食具を近づけたまま待つ親と、食事供給したタイミングで口を開かなければ、すぐに食器具を引き戻す親がいた。

乳児の行動に対する親の反応は多少異なるが、上位2つの行動とも、乳児が意図的に摂食を拒否する行動（食べたくないという意思表示）が含まれることが多かった。先述の通り、9ヵ月頃になると、自分の意思を他者に伝えようとするようになる（Tomasello, 2008）ことから、偶発的に摂食外行動が表出されるよりも意図的な摂食外行動が増えたことが推察される。

③親の食事供給行動に対する乳児の摂食外行動の出現率

乳児の摂食外行動率は父親で平均32.12%、母親で平均34.93%であり、親が食事供給したうち、3分の1以上が乳児の摂食に至らないという実態が明らかになった。先行研究（例えば、唐田・森田、2007；岡田、2014）において、数ある育児行動の悩みの上位に離乳食にまつわる事柄が挙がることの

裏付けになったと考えられる。ただし、個人差も大きく、父親に関しては12.50～94.20%の開きが、母親においても12.33～64.15%の開きが見られた。つまり、1回の離乳食場面の中で親の食事供給行動の9割近くが乳児の摂食につながる（乳児に食べてもらえる）ケースもあるが、一方で、9割以上摂食につながらない（乳児に食べてもらえない）ケースもあるということである。後者に関しては、食事のたびにこのような状況が生起すれば、親のストレスはかなり高まるものと推測される。

なお、本研究の対象児は10名とも比較的近い月齢であったため、食事量に大きな差はなかった。しかし、親の食事提供行動頻度には大きな開き（個人差）がみられた。これは、乳児の摂食外行動による場合もあるが、それ以外にも、食具に乗せた食事の量の違い（親が設定する一口量の違い）や乳児がそれらをきれいに口に入れるか、半分程度しか口に入れないかという違いによる場合もあった。食事提供行動頻度や食事時間には親子の個人差があったが、それらと摂食外行動率とは相関がみられなかった。つまり、何回も食事提供されたり、長々と食事提供されることで乳児が飽きて摂食外行動率が高まることが予想されるが、そのようなことはないということである。今回の対象者のうち、比較的食事時間が長い親は、ダラダラと食事提供していたわけではなく、乳児が飽きないように、食事の合間で食事以外のコミュニケーションを楽しんだり、適宜、乳児の気分転換をしたり、乳児が食べるタイミングを見計らって、こまめに食事提供するなど、乳児の摂食外行動率が高まらないような工夫を凝らしていた。福田・森下・尾形（印刷中）によれば、日頃から乳児への関与が多い父親ほど摂食成功率が高い（摂食外行動率が低い）ことが示されている。日頃から乳児との関わりが多いことで、乳児の様子を素早く察知することができ、食事中に気晴らしを取り入れたりすることができたのではないだろうか。その一方で、気分転換等をせずとも短時間の少ない食事提供行動で一気に食べ通せる乳児もあり（乳児の気質や空腹の度合いによる可能性もある）、親の食事提供行動頻度自体が乳児の摂食外行動に影響するわけではないようである。

今後の課題

今回は、乳児の摂食外行動の出現状況について明らかにした。個人差があるとはいえ、親の食事供給行動の30%以上は摂食に至らないという実態が浮き彫りになり、離乳食を与えることの困難さが実証された。

しかし、今回は乳児の摂食外行動は行動面のみを扱い、そこに含まれる乳児の感情や意図は検討しなかった。映像を視聴する限りでは、同じカテゴリーに含まれる摂食外行動であっても、親の食事供給を完全に拒否するネガティブなもの、親とのコミュニケーションを図ろうとするポジティブなものが含まれていた。このように乳児の感情・意図という観点から分析することで、親に与える影響もより詳細になると考えられる。

また、乳児の摂食外行動の出現には、親の対応もかなり影響していることが推察された。本研究では、細かい親の行動は扱っていないため、今後は、親のどのような行動が乳児への摂食行動をスムーズにするかを検討する必要があると考えられる。そして、その親の行動に影響を与える要因も併せて検討する必要があるだろう。

謝辞

本研究の実施にあたり、科学研究費（基盤研究(C)（一般）課題番号17K04366、研究代表者：福田佳織）を受けた。また、調査の実施にあたり、多くの皆様のご協力を頂いたことに心より感謝申し上げます。

引用文献

- 天野信子 2011 1歳半健診受診者の母親を対象とした離乳食に関する実態調査 帝塚山大学現代生活学部紀要, 7, 55-63
- ベネッセ教育総合研究所 2018 乳幼児の生活と育ちに関する調査2017 0-1歳児編 ベネッセコーポレーション
- 唐田順子・森田明美 2007 乳幼児をもつ母親の子育てに関する困りごとや悩みごとに関する研究一児の年齢別、初経産別による検討一東洋大学人間科学総合研究所紀要, 7, 249-263
- 厚生労働省 平成27年乳幼児栄養調査結果の概要 第1部 乳幼児の栄養方法や食事に関する状況
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000134207.pdf>（アクセス日：2019年6月4日）
- 福田佳織・森下葉子・尾形和男 印刷中 父親の摂食成功率と父親の育児関与状況との関連一離乳食場面の観察から一日本発達心理学会第31回大会
- Gartstein, M. A., & Rothbart, M. K. 2003 Studying infant temperament via the Revised Infant Behavior Questionnaire. *Infant Behavior and Development*, 26, 64-86.
- Halverson, H.M. 1931 An experimental study of prehension in infants by means of systematic cinema records. *Genetic Psychological Monograph*, 10, 107-286.
- 内閣府 2016 男女共同参画社会に関する世論調査
<https://survey.gov-online.go.jp/h28/h28-danjo/2-2.html>（アクセス日：2019年10月30日）
- 中川敦子・鋤柄増根 2005 乳児の行動の解釈における文化差はIBQ-R日本版にどのように反映されるか 教育心理学研究, 53, 491-503
- 尾形和男 2013 父親の心理学 北大路書房
- 岡田美紀 2014 子育て支援としての離乳食訪問指導の提案 環太平洋大学研究紀要, 8, 47-54
- 総務省 2017 平成28年社会生活基本調査一詳細行動分類による生活時間に関する結果一結果の概要
<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gai-you3.pdf>（アクセス日：2019年8月8日）
- 総務省 2012 平成23年社会生活基本調査 生活時間に関する結果 要約
<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/houdou2.pdf>（アクセス日：2019年8月8日）
- Tomasello, M. 2008 *Origins of human communication*. MIT Press.
- 山口昌伴 2001 食の道具たち① 食の科学, 276, 50-57